

◆2009年 5月

八木健選 「七句」・・・ (鑑賞も五七五)

1. **秒針をちぎつてしまふ時計草** (工藤泰子)
デジタルの世にアナログの時計草 ですな
2. **憧れの人に夏風邪もらひ度し** (佐藤古城)
口づけのときには外すマスクかな などと
3. **売る時は外して香具師のサングラス** (清水純一)
偽札を見分けられないサングラス だもんなあ
4. **幾人か落したき人蟻地獄** (松田吉憲)
虫の名も穴の名前も蟻地獄?
5. **平日の花見増えたる不況かな** (丸山紘)
週末になればだれもが花疲れ ですな
6. **春眠の大往生となりにけり** (白井道義)
死に方に苦楽のあれば楽が良し
7. **だれその指図は受けず椿落つ** (奥脇弘)
空いてゐる地面をめざし落椿ですな

青山桂一
栖を忘れ雲雀茫然ホバリング
川鯉につきあひ頼み鴨残る
花筏ゆるり参らふ阿弥陀土へ

秋月裕子
花咲いて散りゆくカ青き星
地下鉄に乗り込む吾と花びらよ
花筏何処へ流る失職者

麻生やよひ
焼け石に水春窮の給付金
尖がりて突つ張るすえに咲く躑躅
世に出るを嫌がり蛤口開けず

足立淑子
仏さまが食べたのかしらさくらんぼ
バランスを崩して飛んだ鯉のぼり
五月闇心の底に潜むもの

有富洋二
カーネーション届き息子の安否知る
凸凹の道に草笛乱れたり
束の間の見つめ合ひなり青蛙

安藤淑子
老夫の言春雷となり妻感電
爺の髪刈る姿バーバー春の縁
三姉妹の媪姦し花吹雪

井口寿々子
四月馬鹿持ち上げられて落とされて
春光の飛び跳ねてある隅田川
人の和に春愁どこか置き忘れ

池田無了
豊乳肥臀御年十八衣更
母の日や母の仇と父を打つ
雀百まで老嬢踊る髪赤し

稲沢進一
「はい」と言ひ「はい」と答へて四月馬鹿
ほんたうは頑固者です地虫出づ
浮いて来いアルキメデスの原理とは

今城夏枝
四月去りゆくトンネルの闇を抜け
ふらここをこぎ校庭を独り占め
蕨探るぼきぼき野原折るやうに

奥脇弘久
だれその指図は受けず椿落つ
バーカ馬鹿と闇夜に叫び四月尽
筆不精赦されたしとつくしんぼう

可知豊親
天照らすほとやはらかき伊勢あはび
花は葉に傍題に無き不思議かな
けふよりは余花と呼ばれる長丁場

加藤 賢
竹秋や立札やたら目について
鶯の庭で啼きしは誤解なり
誕生日迎へて春を惜しみけり

草薙一朗
公達に狸も化けるおぼろ月
遠足や民話に疎き新教師
おうどんの道も究むる遍路かな

有吉堅二
母の日は妻の日でなし触れでおく
一物も臆さぬ江戸の鯉のぼり
新茶だと聞けば新茶らしくなる

飯塚ひろし
花筵四角に拡げ丸く坐す
肩を組む吉良も内匠も花の山
楽をして瘦せる薬や亀鳴けり

井口夏子
入学のぴかぴかどどん晴れわたる
接骨木の骨整えし接骨院
春風に顔をさしだし息を吐く

伊藤浩睦
卒業し明日より無職となる身かな
春暖炉点たき妻に点けぬ夫
風船の似合わぬ婆のふたり連れ

井野ひろみ
春風をまとう装ひララララ
つくしんぼ次に見つけ土手上る
花むしろ白寿の年を忘れおり

越前春生
亀鳴いて右脳左脳の使いすぎ
死ぬための余力残して青き踏む
自叙伝のみな美しき万愚節

笠 政人
嘘一つ言へぬ男の万愚節
塀こゆる紙風船のやんちゃ振り
浪花場所羽二重肌の相撲取

加藤澄子
団体で泳がされてる鯉幟
一本桜カメラに包囲されてある
三個ゝや三椏の花簪

川島智子
不覚にも厨に生れし葱坊主
山笑ふ烏天狗のマスクして
春眠と云ふも目覚めて居る齡

工藤泰子
秒針をちぎつてしまふ時計草
スイトピーいづれも同じ莢と種
きらん草猫ひとつとび越え行けり

倉方 稔
客ひとり駅員ひとり遅桜
老いてなほ浮名奔らす 4月馬鹿
平成を昭和で数ふ昭和の日

小杉 隆
苺菓子血圧さがり妻へかな
いただいて三日続きの浅蜷汁
吟行てふ徘徊せしや万愚節

桜井宇久夫
春耕や厠攻め来る機械音
赤飯を持ち帰りたる花見かな
筈は嫌ひと結ぶ義歯の口

佐藤古城
本町の本田本屋の本の紙魚
おちんちん欲しと裸の女の児
憧れの人に夏風邪もらひ度し

佐野ゆきこ
遠吠えや夕の時報に相和して
雑草をぬく手ためらうイヌフグリ
ひとめぼれ名を問うてみる他家の花

清水純一
即かずとも離れず対の蝮の道
売る時は外して香臭師のサングラス
三代のなべて口下手牛蛙

壽命秀次
桜咲く車座に鎮座の薦被り
箱の中黄色い声の春キャベツ
トラクター黙らせ青空ひばり聴く

杉村福郎
生真面な人が集ひて万愚節
尼寺の門を出でずに浮かれ蝶
また馬鹿か呟きながら貝を掘る

鈴木清
春爛漫政治に不満子は自慢
蚪蚪並び童謡唄う泥田かな
菜の花の絨毯敷いて蝶昼寝

高橋真紀子
置いてけぼりや菜園の葱坊主
クマバチを用心棒に藤の花
即席麺の御馳走となりぬ春キャベツ

黒田忠一
マニフェスト禁酒禁煙 4月バカ
スカスカの脳の透き間に花見酒
初音にも不況の風邪かのど飴を

小玉石水
同窓会で喧嘩している人間モザイク
喜寿が傘寿を笑っている新年会
こどもが楽しそうに
チューリップ首取ってゆく

佐治洋一
山笑ふ講演会の大いびき
奇術師の手から銭消え山笑ふ
ぐしやつと高さ枝から蛇落ちる

佐藤義子
こいのぼり泳ぎ疲れて塩鮭よ
カメラ持ちふらつき登る山野草
さりげなく赤をかくし着老払う

柴田真一
棚舞台自来也もどき藤の花
ちゆんと立ちちゆんころりと雀の子
花よりも人間空気椅子で戯れ

首藤虎男
巻舌でカードだまされ四苦八苦
五円かぶと節句かけつけ御縁あり
鮪捕り死活格闘魚有無

白井道義
目薬で流す涙や春愁ふ
銭湯の壁に富士山山笑ふ
春眠の大往生となりけり

鈴木和枝
ねぎ坊主と私の接点何か有るはず
下手に切つても人参
それなりの花になる
桜吹雪どなたも善人になれますよ

高田菲路
威張りみて尻まる見えや羽抜鶏
ジャズ喫茶ひとり静の花の鉢
真夜中の月下美人に招かれし

高橋都喜子
破れ傘チラリ鬼太郎の目光る

高橋都
自由市小町娘の春小袖
理不尽な場にも蒲公英顔を出し

高橋素子
のどかさや駅に立ち寄る芭蕉翁
彼の世へは左右のどちら遍路道
双蝶や影のひとつに纏れあふ

田代青山
かげろふをひつさげてきし杖の姿
陽炎よりもどり腓にサロンパス
かげろふをむしやぶり食うてカバとなる

田代青波
昼蛙日野皓正の膨れ頬
青空といふ頭痛薬紙風船
長閑しや美容筋トレ百面相

高田敏男
空くボトル世間このごろ明け易し
花衣浮かれ騒いで花粉症
飲み会は出世街道新社員

伊達仲秋
庭にきてアツと驚く目白かな
雨蛙急いで跳ねて落命す

田中章子
人知れず阿修羅も笑ふさくらの夜
幼子やうぐひす餅の目をさがし
詠めぬうち桜さくらの散りにけり

種谷良二
不人気なキャスター降りて三月尽
騙された振りも優しさ四月馬鹿
おつぼねの話題をさらう新社員

飛田正勝
夜間部を四年皆勤卒業子
女峰から男峰への風の薫りけり
ひととせに三寸伸びし子供の日

笑子
ペテン師の本日本音 4月馬鹿
白魚や尾頭つきの五万匹
本家どり相撲に野球花盛り

永井一朗
右顧左睨つい腰折れの葱坊主
畦を焼く爺のくどくど老婆心
種選ぶうしろに鶏の盗み足

中沢荘荷
ほんのすこし貯金ふえたり蜷汁
親馬鹿が遺す美田に老蛙
余生とは愚に徴すことやせ蛙

永島董玉
亀啼くや一万回の誕生日
ドーナツの穴を残して磯遊
春陰の部屋に籠れば壁に耳

中本郷顔
長閑しやお化メイクにふける娘ら
まだ君を忘れたくない猫の恋
仏様に手紙を書いて入学す

暇 崇子
早すぎた衣類しまいし霜の朝
丸丸にとんがり帽子がとれた人
準備中ゆつくり咲きたし桜花

西 をさむ
行く春を隣の犬と眺めける
六十の茶摘女機械を手懐ける
日本の空が大好き五月鯉

根岸敏三
口の中生き返りたる白子干
蝌蚪の瓶兄弟増えたと一人つ子
草野球転びて球に初夏の空

原田 嘩
行く春をペコちやん叩き行く子かな
枕辺をけものの行き来朝寝かな
チューリップ持たされ妻を待つてをり

彦坂義久
お荷物はお父さんです青き踏む
吾と亀が鳴いて妻だけ高笑ひ
成り難し4月にいつも思ふこと

久松久子
皺も肝斑も開き直つて日向ぼこ
鹿尾菜煮て石を噛ませてやりにけり
男傘万朶の花に困まるる

日根野聖子
尻尾振る振る懸命の蛙の子
右回し左回し誰か待つてる春日傘
もう一つ食べるか止めるか桜餅

藤岡蒼樹
目隠しに「鬼さんこちら」花の下
川風やひとり一匹雀の子
春昼や籤を白寿が買ひに立ち

藤原セツ子
花びらをつけて入りけり大歌舞伎
俊寛の怒号や花を散らしめる
花びらと月と入りたる露天風呂

星加克己
寧楽の春腰はくの字の女身佛
飯蛸の頭くらひて般若湯
爛漫の花に傾く大八州

前川敏夫
鶯の途中ずつこけ谷渡り
散る花に憎らしいほどマメな風
四月馬鹿分別できぬ宇宙ゴミ

松田吉憲
二枚目を演ずる疲れ万愚節
大ふぐり持ちて追儼の鬼をどる
幾人が落したき人蟻地獄

三木蒼生
切腹を医師の告げをり四月馬鹿
精力絶倫たかんなの腰太き
言の葉の刃刺されし四月馬鹿

三橋一笑
豆の苗夫買ひ実らせるは妻
タケノコや剥きても何もないと言ふ
大渋滞横目に夫婦の田植えかな

虫倉蟬音
カラオケの洩れくる山家辛夷咲く
マスクして道のり遠き聞き上手
騙されて嬉しきことも万愚節

村上美和
魚島へ船首は風を切つてをり
神苑の空へ棒立ち松の芯
惜春や音吐き出して出航す

広瀬遊亀男
命名の蜥蜴まだ見ぬ給付金
異国人車座を見て桜見る
政治屋は人騙すとき白いシャツ

藤森荘吉
後ろ向き時にはよろしボート漕ぐ
花の下皆弁当は幕の内
うららかや元気は要らぬただ呑気

坊野留吉
嘔吐いた頃がなつかし四月馬鹿
たんぼぼの絮飛びあんだあれかな
暗闇は声の特訓春の猫

堀川亮二
妻とわれ二人三脚耕しぬ
花粉かなまず疑つて春の風邪
たかんなののびのび延びる大地より

松尾軍治
御開帳親子で踊るストリップ
寅さんも仕事精出す花見かな
黄水仙湖水に写るナルシスト

丸山紘一
凱旋の侍迎ふ春の雪
平日の花見増えたる不況かな
春の陣騒いだ方が顔赤め

三塚不二
辛酸を少しは舐めて薬の日
竹の秋ウグイス嬢の声囁れし
母の日やバラの花束棘抜かれ

無患子
子があらば万作と呼びたい万作咲いて
ねこやなぎになれないものか丸まる
山城の筍飯には御代りを

むつみ
花粉症人驚かす大くしやみ
海賊や軍艦の行く春の海
つばくらめ日本は鼻眞は親譲り

百千草
金鳳華いつしか消へし巨大店
君らしく生きよたんぼぼ大空に
直線は父曲線は春の川

森岡香代子
ミツバチの行方不明や花の昼
半袖や熟女の肌を見せたがる
絵の具にはなし白無垢のバラの白

諸中昌之
紙魚の来ぬ広辞苑かな電子辞書
敵は熱べつかふ飴の兜虫
あずまやの四角四面に初伏かな

柳澤京子
春の膳囲みて友と憂さ晴らし
咎められそれでも好きな桜餅
ピンと立つ白魚刺身点と線

山下正純
段畑や航跡追ひて春眠す
山祠澄歌納むる百千鳥
桃の花川面枝垂れて何求む

山本けい子
花吹雪くシャトルコックに急かされて
花吹雪力車を曳くはラガーマン
十三詣の振り向かずゆく渡月橋

横山喜三郎
早乙女の媪派遣に追はれをり
焼鳥の店に燕も来てをりぬ
来賓の数多や一児入学す

瑠美子
蛇出ずるしばし佇みもどり行く
ミニスカの花見衣の手にマック
干潮の浦は裸よ山笑ふ

森 要
桜咲く霞か雲か我が眼もや
葉数では若木に負けぬ古木かや
春来なば花鳥風月四句八句

八木健
賛成なのか反対なのかソーダ水
群れたがるものにヨットの白帆かな
西洋と名づけタンポポ帰化させず

山岡冬岳
夏瘦の皺隠しみる厚化粧
止めること知らぬボートを漕ぎ出しぬ
仰向いて玉の詰まりしらムネかな

山本あかね
草餅や圧倒的に漉餡派
鯉のぼり腮呼吸して泳ぎ出す
麦秋や父に似し子の大雑把

山本 賜
雨の日のあやめを描いて特別賞
鉢植えに挿して図工の鯉のぼり
よその子の赤い風船ほしがりぬ

吉田恵子
行く春やキリンは首を伸ばしける
こでまりやてんてんてん毬をつく
去年の実を残ししままに新芽伸び

渡部さだを
マネキンに厚着をさせるもどり寒
一つ訊き二つ忘るる万愚節
花見してセールスマンは油売り